

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2015.12) 平成26年度:53-55.

進行がん患者の看護過程をデスカンファレンスで振り返り得られる看護師の学び

清水 優、末次 さゆみ

# 進行がん患者の看護過程をデスカンファレンスで振り返り得られる看護師の学び

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション ○清水 優、末次さゆみ

## I. 目的

進行がん患者の看護過程をデスカンファレンス（以下 DC）で振り返り得られる学びを明らかにする。

## II. 研究方法

- 1.対象：術前から臨終の看護展開を経験した看護師
- 2.データ収集方法:A病棟で手術・化学療法、臨終を迎えた患者のDCをデータとした。参加者は7人で1時間実施
- 3.データ分析方法:データを意味・類似性に従い一文一意味をコード化、カテゴリー化し主要カテゴリーを抽出した。

## III. 倫理的配慮

倫理委員会承認後対象者に研究主旨を説明し文書で同意を得た。

## IV. 結果

事例は70代女性。直腸がん、多発肝転移。「」コード、<>サブカテゴリー、【】主要カテゴリーを示す。

### 1. 【ギアチェンジの介入への葛藤】

<自己の傾向を振り返る>中で<病期を見据えた介入の不安>を抱き<受け持ち看護師の責務>から

患者と向き合っていた。「死期を予測する質問の可能性はある」と<経験不足>により「想像を超える返答は戸惑う」と<コミュニケーションの不安>があった。「タイムリーな介入が難しい」と<治療時期に適した介入の困難感>と<自立した患者への関わりの困難感>を抱き<経時的な介入の必要性>から介入を模索していた。

### 2. 【がんと共に生きる患者と向き合う姿勢】

「最期までその人らしかった」と患者の<がんと共存し生きた強さ>を感じ<看護介入を振り返る>中で「寄り添う事が看護の役割」と<グリーフケア>となった。「看護を見直せた」と<看護観の再構築>と<チーム医療の重要性>を認識し「発達課題や個人史を踏まえ寄り添う」と<自己課題を明確化>した。「事例と看護観を振り返れた」と<カンファレンスとの違い>を実感した。

## V. 考察

澤頭は「できる事とできない事がある事を共有しケアの限界を認める事で逆にできた事が改めて見えてきてそれが自信に繋がっていく。」と述べている。看護過程を振り返る事で課題が明確化し共有した事が看護の意味づけや改善策の具体化へ繋がったと考える。

## 進行がん患者の看護過程を デスカンファレンスで振り返り 得られる看護師の学び



旭川医科大学病院  
6階東ナースステーション  
○清水優 末次さゆみ

## 日本サイコオンコロジー学会 COI 開示

筆頭演者氏名 清水優

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある  
企業などはありません。

### I. はじめに

- \* 看護師は、進行がん患者と術前から術後、化学療法を短期入院で繰り返し、臨終を迎えるまでの長期間患者と関わる中で、日々どのように関わっていくか迷いや葛藤を抱いている
- \* 日々のカンファレンスではその時々に必要な看護を話し合い、検討しているが、患者の死後に事例を振り返り、話し合う機会が少ない

### II. 目的

進行がん患者の看護過程を  
デスカンファレンスで振り返り  
得られる学びを明らかにする

### III. 方法

- 1) 対象：術前から臨終の看護展開を経験した看護師
- 2) データ収集方法：A病棟で手術・化学療法、臨終を迎えた患者のデスカンファレンスをデータとした参加者は7人で1時間実施
- 3) データ分析方法：データを意味・類似性に従い、一文一意味をコード化、カテゴリー化し主要カテゴリーを抽出した
- 4) 倫理的配慮：倫理委員会承認後、対象者に研究主旨を説明し文書で同意を得た

### IV. 結果

#### <事例紹介>

- \* 70代女性。直腸がん、多発肝転移
- \* 術前化学療法施行し、手術後約2年間化学療法施行

#### <参加看護師概要>

- \* 参加人数 7名
- \* 看護師経験年数 5年目から21年目

## 1) ギアチェンジの介入への葛藤

サブカテゴリー	コード
自己の傾向を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者の気持ちを想像すると関わりの一歩がでない</li> <li>長い経過だと余計に最期という気持ちが先立つ部分がある</li> </ul>
病期を見据えた介入の不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>疾患の特徴から経過を想像できる</li> <li>終焉に備えた介入が明確ではない</li> <li>何をすべきか答えがわからない</li> </ul>
受け持ち看護師の責務	<ul style="list-style-type: none"> <li>全て自分でやらなければいけない</li> <li>いつでも話せる関係性の構築を心がけた</li> <li>その人らしさを最期まで大事にしたい</li> </ul>
経験不足	<ul style="list-style-type: none"> <li>死期を予測する質問の可能性がある</li> <li>自分の言葉で希望を失わせそう</li> </ul>

コミュニケーションの不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>想像を超える返答は戸惑う</li> <li>最期の過ごし方を聞けない</li> </ul>
治療時期に適した介入の困難感	<ul style="list-style-type: none"> <li>タイムリーな介入が難しい</li> <li>受け止めて経時的に確認したい</li> <li>自立している段階では最期のイメージがついていない</li> <li>治療をやめる段階の時にどう関わるか</li> </ul>
自立した患者への関わりの困難感	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導や教育的な部分での介入はできる</li> <li>指導をする場面は関わられた</li> <li>治療が継続できているときの看護に悩む</li> </ul>
経時的な介入の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>StageIVの患者にはその時期で受け止めて確認していく必要がある</li> <li>評価のCTなど治療の変化があった時に聞くことはできる</li> </ul>

## 2) がんと共に生きる患者と向き合う姿勢

サブカテゴリー	コード
がんと共存し生きた強さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>最期までその人らしかった</li> <li>その人の強さを感じた</li> </ul>
看護介入を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷静に振り返ることで気づけなかったことに気づけた</li> <li>今だから思うことがあった</li> <li>何も気に留めていなかった自分に気が付いた</li> </ul>
グリーフケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>寄り添う事が看護の役割</li> <li>自分の気持ちの整理になった</li> <li>今でもその人から教えられることがあった</li> <li>自分のやったことが意味があったことだと思えた</li> </ul>

看護観の再構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護を見直せた</li> <li>この経験を糧にしたい</li> <li>自分の看護を見直そうと思えた機会</li> <li>今後の課題を具体的に見出した</li> </ul>
チーム医療の重要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>自立している時期に医師と調整する必要があった</li> <li>治療方針あつての看護方針になる</li> <li>医師とのカンファレンスで情報共有していく</li> </ul>
自己課題を明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>発達課題や個人史を踏まえ寄り添う</li> <li>進行している状況を確認して思いや受け止めて確認する</li> <li>レジメンを理解し経時的に受け止めて確認する</li> <li>ギアチェンジ後もその人らしさが維持できるように日々の関わりから全体像を把握する</li> </ul>
カンファレンスとの違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例と看護観を振り返れた</li> <li>自分の気持ちの整理になった</li> <li>冷静に振り返ることでその時気づけなかったことに気づけた</li> </ul>

## V. 考察

- \* 澤頭は「できる事とできない事がある事を共有しケアの限界を認める事で逆にできた事が改めて見えてきてそれが自信に繋がっていく。」と述べている
- \* デスカンファレンスで看護過程を振り返ることで、日々のカンファレンスとは異なる効果を実感でき、事例からの学びが自己の看護観へ影響を与えたと考える
- \* 進行がん患者との関わりに対する課題が明確化され、感情や課題を共有した事が看護の意味づけや改善策の具体化へつながったと考える

## VI. 結語

- \* 「ギアチェンジの介入への葛藤」「がんと共に生きる患者と向き合う姿勢」2つのカテゴリーが抽出された
- \* デスカンファレンスで看護過程を振り返ることで、看護観が再構築され、日々の看護の意味づけや今後の課題の明確化へつながった